

# Dear 地球民

第10号

1993年6月発行

編集発行 ゆがわら国際交流協会

☎259-03 神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1

湯河原町商工会内 ☎0465-63-0111

日米のかけ橋として15年、ホームステイ留学生協会会長

ジャン・ウィルト・ロスさんをお迎えして

## ～ アメリカ・ホームステイへの誘い ～

昨年11月25日に町役場と国際交流協会の共催でアメリカへのホームステイについての講演があり、15年に亘りその実績をもつ、ジャン・ウィルト・ロスさんの貴重な体験にもとづくお話しを聞いた。日米間の貿易問題は多少の問題はあるにせよ、ますます両国間の交流は増え、また時代の変化の要請は、言葉の障害を乗り越えて、共通語としての英語へのアプローチは、特に若い人達に必要なようになってくるのではないか。東京をはじめ今や日本全国に英会話学校が氾濫し、それなりの需要があるのだろうが、やはり一番の近道は、アメリカの本国でホームステイをし、風俗、習慣のまったく異なる生活から学ぶのが一番望ましい方法だろう。円高のメリットもあり、今や留学の費用もあまり心配しないで、簡単に渡航できる時代になっているから、希望する家庭にとっては大変ありがたい話だろう。

表面的にはジャンさんのビジネスは15年の経験があるのだから、スムーズに運営されているのではないかと推察していたが、お話しを聞いてみると、そんな簡単なことではなさそうだった。



講演会は六十人をこえる方が、熱心に聴講質問も多く出され、関心の深さが伺われた



第一に15年の歳月を経て、日本人の生活感覚が大きく変わり、その子達の育ち方にジャンさんは大きな戸惑いすら感じているようだ。たくみな日本語で登校拒否という言葉を使っていたが、例えばそのような子供をアメリカにホームステイをさせて、なんとかなるのではないかと、言ったような甘い親があると困るので、事前にオリエンテーション、(あたらしい環境への)適応・指導などを行い、その適性調査に合格したものだけをお世話するという原則を説明していたが、極めて当然のことだと思う。

もう一つ望ましいことは、せめて実用的、サバイバル・イングリッシュ(人が事故災害などにあっても、生き残るための言葉)の勉強も必要だと思う。この言葉の響きはかなり厳しいが、日本人には想像以上のきびしいアメリカの社会が現実にある。その一例として、昨年日本の高校生が言葉が理解できなくて殺された痛ましい事件は、まだ生々しい記憶にあるが、アメリカではよく聞く実際の話が多い。

英語の理解力・記憶力は若い人ほど良いらしい。ある日本の大学の外国人教授の説によると、人間の脳には二種類あり、たんなる意識する脳と潜在意識する脳とがあり、例えば英語の単語を記憶する場合も、潜在意識する脳に記憶し、コンピューターの記録と同じで何時でも引き出せるようにするのは、子供の方の対応が早いそうだ。

ご自分の子供さんの素質を見て、割合安全なルートとして、勉強をさせてみようと思われる方は、当国際交流協会にお問い合わせください。ホームステイ留学生協会でお世話くださる方が函南におられますので、紹介の労を取らせて戴きます。まずはお知らせまで。

いよいよ我らにも国際協力の幕開け！

## チェルノブイリ原発事故の被爆児を迎えて

湾岸戦争以来、日本政府は先頭に立ってやれ『国際貢献』だ、『国際協力』だとヤッキになり、とうとうPKO参加に踏み切ってしまった。確かに今は『国際交流』と言う言葉は死語になりつつある。私たち協会の活動の中にも、募金活動を通して『協力』を取り入れて来たが、具体的な活動としては『交流』の域を出ていない。その意味で、最近入会した根府川の高橋行雄氏の紹介で、写真家でジャーナリストの広河隆一氏と知り合いになり、彼が主宰する『チェルノブイリ子ども基金』の活動を知る機会を得たことは、私たちの今後の活動の方向性を探るのに絶好のチャンスであった。今回、マスコミでも何度か報道され、何人かは知っていると思うが、チェルノブイリから11人の子供達が来日し、4月2日から1ヶ月間、高橋宅で7人、真鶴の奥津宅で4人のホームステイを引き受けた。私たち協会としても協力したかったが、人数や期間、ホストその他の問題があり、協会としてではなく個人の立場で協力しようということになった。

4月2日、予定を1時間過ぎて午前11時40分、成田空港ゲートからカラフルな服装の可愛らしい子供達11人が2人の付き添い人と現れた。長旅の疲れと緊張で顔はこぼぼっていたが、彼らなりに精一杯元気を装っているのが分かるだけに、その痛々しさが出迎えた私たちを一層感動させた。到着後直ちに記者会見、TV局調達のバスでホスト高橋家レストラン・サドルバックに午後4時30分到着と来日後も強行軍であった。彼らは9才から12才の男子5名、女子6名の構成で、ベラルーシ共和国のホイニキ市からはるばる約30時間かけて来日した。ホイニキ市はチェルノブイリ(ウクライナ共和国)の北約50Kmの位置にある。7年前の原発事故の際、彼らはチェルノブイリから僅か20Kmしか離れていないウラーシー村に住んでおり、幼児期にもろに放射能を浴びた。



ホイニキも放射能に犯され、子供達は白血病から来るガンに倒れ、発病後2ヶ月足らずで次々に死んで行くそうである。そして60万人の子供達が白血病に苦しんでいると聞く。現地は貧困から満足の食料も医薬品もなく、放射能を帯びた野外で駆け回ることもできず、ただ死を待つだけと言う。

2日目の健康診断、3日目の歓迎会と日を迫る毎に彼らは私たちに懐き、笑顔と体全体で気持ちを表現してくれるその可愛らしさに、世話をする私たちには堪らなく嬉しかった。特に日本の子供達には初対面で打ち解けて遊んでいた。ただ日本語は当然、英語の単語も知らず、言葉が通じないのには苦労した。しかし「はい」「いいえ」「ありがとう」「今日は」「おはよう」「今晚は」「さよなら」「いただきます」「ごちそう様」と最小限必要な言葉を少しづつ覚え、帰る頃には「山」「海」「川」「バナナ」「みかん」「犬」などの単語が彼らの口から出て来るようになり、それが益々私たちの感動を誘った。また片浦小学校や沼津加藤学園、東台福浦小学校訪問では全校挙げての歓迎で、授業や給食を共にし、昼休みには球技や縄跳びで日本の子供達と一緒に遊んで遊び、学校を後にする時は子供同士何時までも別れを惜んでいる姿には、私たち大人には何とも言えない心の震えを覚えた。生憎、雨と霧で景色は見えなかったが、登山電車での箱根遠足、帰途湯河原の水泳など彼らは健康一杯の毎日を謳歌していた。通訳を通してもっと何をしたいか尋ねると、「泳ぎたい」と全員が答えていた程、水泳は彼らにとって魅力だったようだ。

4月30日、成田空港での最後の別れの時、ホストには当然だが、私たちスタッフにも1人1人が涙一杯で抱き着いて来た。彼らを抱き締めながらこのままあの恐ろしい現地に帰したくないと誰もが思ったことだろう。今回のこの事業は、彼らに1ヶ月だけでも放射能のない場所で生活させ、放射能に犯されていない食物を食べさせるだけで、白血球が増え、体力も増強されるという大きな効果があることから進められて来た。事実、今回来日した子供達全員が現地にいた時は毎日頭痛に悩まされていたのに、1人も頭痛を訴えた子供はいなかった。1ヶ月前の成田での彼らの顔色は透き通るような青白さだったのが、帰る時には皆、赤味が差す程見違えるようであった。感動の毎日だった私たちには、今回ホストを受けた両家までは行かないまでも、もう少し気楽に手がかからない方法で受けられないかを検討し、あれ程喜んで帰って行った子供達を見て、もっと多くの苦しんでいる子供達にも手を差し伸べてあげたいと痛感した。

(伊藤 公洋)



東台福浦小での交歓会  
子供達には何の罪もない



## 私のセンチメンタル・ジャーニー (6)

(ニューオリンズ・シティ)

ニューオリンズ空港に下り立った時のなんとも言えない感じは、言葉の足りない私にはどう表現したらいいのだろう。昔の同僚になんとなく、巡り合える気安さみたいな雰囲気があった。

つまり気取らない、昔のままの姿で迎えてくれる、そんな街だった。一度に私の過去を取り戻してくれた。例えば、ホテルに落ち着いて、食事をし、すぐにも夜の町に飛び出し、あらかじめ聞いておいたデキシーランド・ジャズを聞かせるホールを探しに出かけた。これがプリーザーベーション・ホール(ジャズを保存するホール)かと思わず言いたくなるようなお粗末な建物、しかも夜だからよく判別できない、暗いところで、入り口でオバさんが無愛想な顔をしてキップを売っていた。もしリクエスト曲があれば、3曲で5ドルだよと言っていた。その昔のよさを、そのまま保存しており、その気取りのないところが大いに気に入った。

演奏を始める前にフラッシュはたかないでほしい、と挨拶があり、メンバーの紹介があった。その編成はまさにデキシーランド・ジャズの少編成で、このスタイルはもともとニューオリンズが生み出したもので、その原形を見たわけである。

リクエスト曲については、英語では残念ながら言い出せなかった。

ルイ・アームストロングが生れ育った街の雰囲気は十分に楽しめた。

さて、翌日街の観光案内を依頼したところ、日本人でアメリカ人と結婚して、この街に住んでいるという人に大変親切に案内をして頂いた。

独立戦争当時の南部軍のリー将軍の銅像が北部を見据えて建っている理由は、アメリカ人には今もなお、深層心理に何等かの南北の微妙なわだかまりが残っている証拠だとか、ユニークな説明があり、おもしろかった。

もう一つユニークな説明で、面白かったのは、日本に帰化したアメリカ人のラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が若き日、新聞記者として、この街に住んでいた頃のアパートを案内してくれた。今は一階がストリップ劇場になっており、その面影はなかった。当時は貧乏な記者で、この街で万国博覧会が開かれた時に彼は日本館の担当でその時にすっかり日本びいきになり、その縁で日本に来ることになったそうだ。

『耳なし芳一』でひろく日本人に親しまれた怪談は有名だが、日本を終生愛してやまなかったハーン(1850~1904)が日本の古来の文献や民間伝承を取材し、怪談を創作し、日本人妻をめぐり、日本に溶け込んだ人として教科書で教わった記憶が今でも鮮明に残っている。

アメリカと日本とはこのような不思議な縁があったのだと思わせる事実があると、この街に余計に魅力を感じたものだ。タイムトンネルを通過して、私の青春が蘇ることができ、まさに私的な感傷旅行記になってしまったが、お許しを請う。(石井 宏樹)

募金ご協力ありがとうございました。

皆様の善意は下記のとおり送金させていただきました。

♥ 神奈川新聞厚生文化事業団へ... ¥65,730 (7/25ジャズサミット)

♥ チェルノブイリ子ども基金へ..... ¥58,800 (12/22クリスマス会チャリティーバザー)

今年の『やさき国際交流』は、7/28(水)~4(水)に、23名の外国人留学生を迎えて、実施を予定しております。ホストファミリーをご希望のご家庭は、お気軽に事務局までお問い合わせください。